

## グローバル教員養成プログラム「インドネシアの小学校，中学校，大学視察」 の実施報告

Exchange Visit of Elementary School, Secondary school, University of Indonesia

眞鍋志野, 石原優人, 井上省吾, 谷川夏菜子, 南野敏男, 日下智志  
Shino MANABE, Yuto ISHIHARA, Syogo INOUE, Kanako TANIKAWA,  
Toshio MINAMINO, Satoshi KUSAKA

鳴門教育大学  
Naruto University of Education

### 1. 背景・目的

本稿は、鳴門教育大学が実施する令和4年度グローバル教員養成プログラム「インドネシアの小学校，中学校，大学視察」の活動報告である。本プログラムの主な目的は、インドネシアの Ahmad Dahlan 大学および公立小・中学校を訪問し、日本の学校教育と比較、考察することにより、学校教育に関する視野を広げ、グローバルな視点を獲得することであった。

### 2. 日程

- (1) 2月26日 日本出国
- (2) 2月27日 インドネシア到着
- (3) 2月28日 SD N Balirejo 公立小学校訪問
  - ・学校紹介
  - ・授業観察（音楽）
  - ・リーダーシップについての講演会
  - ・SMP Muhammadiyah 3 Depok 私立中学校訪問
  - ・Lesson study に関する講演会
  - ・授業観察（家庭科）
- (4) 3月1日
  - SD Muhammadiyah Pakem 私立小学校訪問
    - ・授業観察（英語，音楽，宗教）
    - ・日本文化紹介
  - SMP N 1 Banguntapan 公立中学校訪問
    - ・プログラミングに関するワークショップ
    - ・授業観察（国語，プログラミング，料理，体育，工作）
- (5) 3月2日 Ahmad Dahlan 大学との研究交流会
  - ・講演会

・学校紹介

・大学生との文化・研究交流会

- (6) 3月3日 教材・資料収集
- (7) 3月4日 インドネシア出国
- (8) 3月5日 日本帰国

### 3. 学校視察・授業観察

#### 3.1. SD N Balirejo 公立小学校

私たちの車が学校に到着すると、児童がインドネシアと日本の国旗を振り、大きな声で歌を歌いながら盛大に迎え入れてくれた。オープニングセレモニーでは、竹を使った東ジャワの伝統的な楽器（アングルン）を演奏してくれた（図1）。ドレミファソラシドそれぞれの担当列があり、先生の指揮を基にみんなで曲を奏でてくれた。この楽器は、竹の中をえぐりオクターブに調律しており、その二本の竹筒と竹杵を合わせたもので、細かくゆすることで音を出すようだ。児童は自分のアングルンを色とりどりのキラキラモールで飾りつけをし、自分オリジナルのアングルンにしていた。また、「心の友」を日本語で歌ってくれ、温かい歓迎を受けた。この歌は他の学校を訪問した際も日本語で歌ってくれた。調べてみるとインドネシアでは有名な日本の歌であるようだ。さらに、児童、先生ともにジャワ地域の伝統的な民族衣装を着用していた。月曜日から水曜日は制服、木曜日や特別な日は伝統的な衣装、というように決まっているのだそうだ。このような取り組みからも、学校教育として自分たちの民族としてのアイデンティティを大切にしていこうとする意識を感じることができた。さらに、インドネシアの伝統的な遊びをいくつか紹介してくれた（図2）。Balap bakiak（バラブ バキアク）と呼ばれるムカデ競争や竹馬、日

本の竹ぼっくりのココナッツバージョンなどを私たちも実際にやってみた。日本で行われる遊びと同じような遊びが、少し形は違っても離れた国でも親しまれていることに驚きと喜びを感じた。



図1. アンクルンを演奏する児童。



図2. Balap bakiak を楽しむ児童。

### 3.2. SMP Muhammadiyah 3 Depok 私立中学校

教員に対して、日本型の授業研究 (Lesson Study) の紹介を行なった。授業研究は、各学校レベルの実践から指導する子どもの現状に応じた指導及び授業改善ができることから、教員研修の方法の一つとして世界中で注目されている。インドネシアと日本の教育の現状は異なっているが、教師の教育に対する思いなど共通するものも多い。インドネシアでも指導計画を書くことはあるが、授業研究というものは無いらしく、興味深そうに様々な質問をしてくれた。お互いが話し合ったり、意見を交換することで、新しい視点で考えたり発見をすることができ、インドネシアと日本の双方に教育的効果をもたらされたと感じた。

### 3.3. SD Muhammadiyah Pakem 私立小学校

2年生の工作の授業を観察した。その授業では、紙

を織り込むことにより伝統的な柄を表現する活動を行っていた (図3)。子どもたちは、一人一人に作成する柄が与えられ、その柄を表現するためには縦横の紙をどのように織り込んでいったらよいかを考えながら取り組んでおり、この課題を通して高い創造力を養うことができると感じた。また、制作していた柄は、私たちが街中でもよく見かけた衣類やカゴの柄と共通するものがあり、地域の伝統的文化や産業との関連を意識した学習内容であった。

次に6年生の宗教の授業を観察した。残念ながら授業内容を深く理解することはできなかったが、日本の道徳教育に近いものであると感じた。その授業の中で、子どもから意見を回収する際に ICT 機器が活用されていた。教師の質問を受け、子どもたちはあらかじめ配布された QR コードのようなものを自分の意見に合わせて教師に示す (図4)。教師はそれをスマートフォンのカメラで写すことで、全体の意見を簡単に集約していた。日本でも子どもの意見を集約しながら授業を進める取組みはよく行われているが、それは Forms 等を用いて子どもが自ら PC 等を操作する必要がある。ただしその方法では、ネットワークのトラブルや子どもの ICT 機器活用能力の差から、うまく意見を集め



図3. 工作の授業で紙を織り込む様子。



図4. 宗教の授業で自身の QR コードを掲げる様子。

られないといった問題が何度か起きていた。今回見た実践には、教師だけが機器を操作し、子どもがPC等を使用しなくてもよいといったメリットがある。今回のICT機器活用方法は日本での授業でも取り入れてみたい。

### 3.4. SMP N 1 Banguntapan 公立中学校

国語の授業を観察した。生徒たちは、グループで1つのパソコンを使いながら、記事を書く活動をしていた(図5)。授業が行われていた図書室にはスクリーンとプロジェクターが設置されていた。今回の授業見学中にスクリーンとプロジェクターが使用されている場面は見られなかったが、それらがあれば、生徒たちが作成した記事を簡単に教室内で共有することができる。日本では、生徒に一人一台のタブレット端末が支給されており、ほとんどの授業においてタブレット端末を使った授業が行われている。インドネシアでも同様に、パソコンを使って、国語などの様々な教科において活用されていることが分かった。

また、中学1年生の生徒20名に、Scratchで正三角形を描くというワークショップを行った(図6)。初めにScratchを使って三角形を描いたことがあるのか確認すると、既に授業でやったことがあると回答し



図5. 国語の授業にてタブレットを活用する様子。



図6. プログラミングについてのワークショップ。

たため、本授業では三角形を描く復習を兼ね、三角形を描くためのプログラムの組み立て方に焦点を当てた。生徒は、Scratchを使ってゲームを作成した経験があることから、プログラミング能力を一定程度身につけているように感じた。しかしながら、実際にワークショップをしてみると、生徒たちは与えられたプログラムを模倣することはできるが、プログラムを組み立てることの本質を理解していないように感じられた。ワークショップ後、先生方から話を伺うと、生徒たちはプログラミングの授業において先生から出されたプログラムを真似して組み立て、ブロックの中の数字を自由に変えるという活動が多かったようである。今回のワークショップは、生徒たちがいつも受けている授業とは異なり、自分たちでプログラムを組み立てていくスタイルだったため、生徒たちにとっては難しかったかもしれない。しかし、ワークショップを見ていた先生方からは、今までと違った新しい授業スタイルであったため生徒たちにとって良い経験になったというコメントを頂けた。

### 3.5. Ahmad Dahlan University での講演会

日下先生とRully先生の講義形式の講演会が行われた。各々“Importance of Misconception in Mathematics learning”, “Exploring Alternative Solutions to Learning in Remote Areas using the Community Radio-Based Blended Learning Model”というテーマであった。両講義ともに40分程度の発表時間に加え、質疑応答の時間が設けられた。両方の発表に対して質疑応答があり、内容をより深めることができ、教育に対する新たな知見および示唆を得られる場であった。

また、これまでオンラインで研究交流を続けてきた大学生と共にお互いの文化や研究を紹介し合った。寿司やラーメンの写真を提示すると大盛り上がりで、日本食の魅力がインドネシアにも伝わっていることに喜びを感じた。インドネシアではあまり日本食を食べられるところがないということだったので、日本のお菓子をプレゼントすると大変喜んでくれた。また、インドネシアにも日本と似た遊びや文化があるが、全く同じではなく、それぞれの文化の特色が表れており、興味深く感じた。

## 4. おわりに

本研修の成果は大きく次の三点である。一点目は、多文化共生を体験できたことである。インドネシアや乗り継ぎで訪問したシンガポールでは、異なる文化や民族といった多文化の中で生活していくことが当たり前になっていた。自分達とは違う価値観の人々と共存

することは難しいが、そういった多様な価値観に多く触れることで、人間としての広がりや成長を感じることができた。今後グローバルな社会で生きていくためには、相手の文化に対する知識を持つことや思いやりの気持ちを持って相手に接すること、普段から色々な文化に直接触れることが大切だと感じた。二点目は、インドネシアと日本の教育を比較することで、日本の教育を改めて見直すことができたことである。例えば、伝統を重んじるインドネシアでは、私たちが訪問した全ての学校で伝統的な楽器や料理を学校教育の一環として行っており、歓迎の際に踊りや演奏、料理を振舞ってくれた。日本も伝統継承を行う教育はあるものの、決して多くはない。伝統的な事柄や昔ながらのものに触れたり親しんだりする時間をさらに充実させることで、より豊かな情操が育まれたり伝統を次世代に継承できるのではないかと考えた。両国の教育における良いところをお互いが工夫しながら取り入れ合うことで、よりよい教育を目指せると強く感じた。三点目は、言

語の壁があるコミュニケーションについて経験できたことである。両国にとって英語は母語ではなく第二言語であるため、コミュニケーションを取ることは決して容易ではなかった。だが、話す際にジェスチャーや豊かな表情で自分の気持ちを表現したり、授業をする際に視覚的に分かりやすいように図や写真を用いたり、私たちにりの工夫をしながらコミュニケーションを取ることができた。現代社会にはAIや翻訳機があり、それらに頼れば言語を学ばなくとも言葉を伝えることができる。だが、言語はコミュニケーションであり、機械を通すのと自分で伝えるのでは違った意味をもつことを実感した。たとえ言語の壁があろうとも諦めずにお互いが歩み寄ることが大切であると考えた。最後に、今回このような貴重な機会を与えていただいた日下智志先生、インドネシアでの活動をコーディネートしていただいたアフマドダフラン大学の先生方、生徒の方々、現地で関わって下さった全てのみなさまに感謝申し上げます。